

オルタナティブ
人間論

文◎田坂広志
text = Hiroshi TASAKA

6

人類の知 第五の成熟
「理論の知」から「行動の知」へ

21世紀に起こる「人類の知 七つ
の成熟」の第五の成熟は、何か。
それは、「理論の知」から「行動の
知」への成熟である。

言葉を換えれば、それは、「理論や
方法を語る」能力から、「その理論や
方法を使って行動や運動を起こす」
能力への成熟とも言える。

しかし、そもそも東洋思想に「知
行合一」という言葉があるように、
「知」というものは、この「理論の知」
と「行動の知」が結びついて、初めて
意味を持つ。それにもかかわらず、
この「行動の知」の大切さが語られ
るのは、なぜか。

それは、現代においては、「知行分
離」すなわち「理論の知」が「行動の
知」から分離してしまっているから
に他ならない。

近年、「評論家的」という批判の言
葉がしばしば使われるように、安全
な高みに立って「理論」や「理屈」だ
けを語り、自身の「行動」や「現実」に

責任を取らないという知のスタイ
ルが溢れている。

このことを、かつてカール・マル
クスは、次の言葉で批判した。

「哲学者たちは、これまで世界を
解釈してきたにすぎない。大切なこ
とは、それを変革することである」

(Philosophers have been
translating the world, but
important thing is to change it.)

そして、「行動の知」が重要とされ
ることには、古来、もう一つの大切
な理由がある。

「行動」とは、最も洗練された「認
識」のスタイルだからである。

すなわち、知の世界には、言葉で
表すことのできる「言語知」と、言葉
で表せない「暗黙知」があるが、実際
に行動し、現実と格闘するという体
験を積まないかぎり、この「暗黙知」
を掴むことはできない。

しばしば、「学者の浅智恵」という
批判の言葉が使われるが、この言葉

は、行動や実践を通じて経験や体験
を積むことなく、観念の世界で理論
や理屈を語るだけの学者が、深い
「暗黙知」を身につけていないこと
への警句でもある。

では、我々は、どうすれば、単な
る「理論の知」を超え、「行動の知」に
向うことができるのか。

最も大切なことは、「自らを行動
に駆り立てる何か」を持つことであ
ろう。それはときに、自身の人生に
おける痛苦な原体験であり、悲しみ
や苦しみの中にある他者への深い
共感であり、現在の社会や組織の矛
盾に対する強い憤りであろう。

もし、その「何か」を深く見つめる
ならば、我々は、リスクを恐れず「行
動」に向う勇気を得る。

そして、生々しい現実と格闘する
「行動」の中からこそ、最も生命力に
溢れた「理論」が生まれてくる。

そのことも、「知行合一」という言
葉が、深く教えるものであろう。

たさか・ひろし◎81年、東京大学大学院
修了。工学博士。87年、米国パテル記念
研究所客員研究員。90年、日本総合研究
所の設立に参画。取締役・開発戦略セン
ター所長等を歴任。00年、多摩大学大学
院教授に就任。同年シンクタンク・ソフィ
アバンクを設立。03年、社会起業家フォー
ラムを設立。08年、世界経済フォーラム(ダ
ボス会議)のGlobal Agenda Councilの
メンバーに就任。著書に「目に見えない
資本主義」「未来を予見する5つの法則」
など60冊余。